

障害者に日本舞踊を

～日本舞踊におけるバリアフリーをめざして～

長崎由利子*

A Case Report to Teach Handicapped Person Japanese Dancing
Yuriko Nagasaki

I. はじめに

日本舞踊は、障害のない人が幼時から厳しい訓練を受けてプロになるものであり、趣味として嗜む場合も「障害のない人対象」が常識である。が、私は、十数年前、自分の日本舞踊教室に聴覚障害を持つAさん（70代・男性）の来訪を受けてから、この「障害のない人対象」の常識に疑問を抱くようになった。Aさんは、日本舞踊が好きで練習を見学させてほしいと申し出た。それ以後、時々やって来ては楽しそうに見学していくAさんと交流するうちに、「Aさんにも踊らせてあげたい、障害者の日本舞踊も必要だ」と思うようになり、その方法を模索していた。

そんな折、『世界めざし日舞の手話劇』という新聞記事を見つけた（朝日新聞、1987）。そこには、アマチュア聴覚障害者劇団「九十九」が手話で日本舞踊を演じたことが紹介されており、私は、「これだ！ Aさんが日常会話に使っている手話と日本舞踊のドッキングだ」と、膝を打った。日本舞踊は、肉体を駆使して主人公の心理や周囲の情景を表現する芸術であり、手話は、聴覚障害

*日本舞踊教授

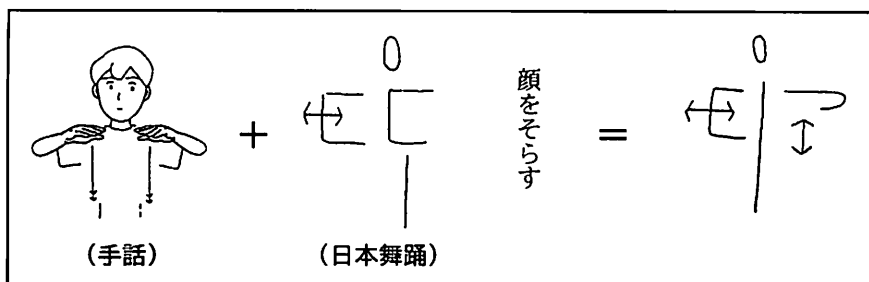


図 2

2. 第二段階

次は、「雨」という言葉を選び、左手で「雨」の手話（両手のひらを下に向けて、繰り返しおろす）をし、右手は、日本舞踊で「雨」を表現する型（袖の中に入れた手を左右に振って雨を払う動作）をして、顔を左下に向けてそらす。すると、雨が降ってしずくを払っている日本舞踊の型ができる。

ここでは、一つの言葉について、手話と日本舞踊の動作を同時にすることを練習した（長崎，1997）（図2）。

3. 第三段階

手は、前段階の「雨」の動作をしながら、それに、すべる・踏むといった日本舞踊の足の基本動作を加える。この段階に至って、今までの手だけの動作に足の動作が付き、より日本舞踊らしくなった。

さらに、「Aさん用プログラム」の仕上げとして、通常の『手話辞典』等には載っていないが、日本舞踊にはよく出てくる「三味線」という言葉を表現してみることにした。今度は、手話の該当動作がないので、日本舞踊の「三味線」の型（右足を出して座り、左手は親指と人さし指で輪を作り、右手は一枚開きの扇子をばちのように持つ）をもとにして、立ったまま、左手は日本舞踊と同じ輪を作り、右手で「し・ゃ・み・せ・ん」と指文字をしながら、右足から「ト・コ・トン」と三つ踏む練習をした（長崎，1998）（図3）。

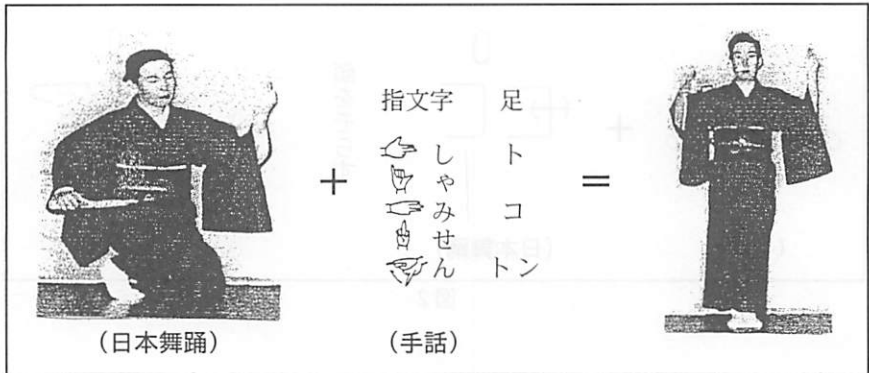


図 3

III. 考察

前章の通り練習を進めてみると、第一段階は楽勝で、第二段階は、右手と左手で手話と日本舞踊という別の動作をすることに最初は苦戦気味であったが、慣れるとコツをつかんだようである。第三段階になると、足の動作も加わりかなりの苦戦となったが、Aさんの熱意と努力で、二ヶ月程するとすべる・踏む等の足の動作も習得し、指文字に合わせて「ト・コ・トン」と踏むことができるようになった。また、練習の回を重ねるごとに、足腰がしっかりしてくる、表情が明るくなる等の効用も認められた。さらに、教室に通ってきている健常者の中から、「私もこれをやってみたい」と言う者も出て、Aさんから手話を習いながら、このプログラムを楽しみ、障害者と健常者の交流の場ができたようである。

さて、ここで、障害者が日本舞踊を習得することによる効用をまとめておきたいと思う。第一は、健常者にも言えるが、日本舞踊の動作は、腰の上下・ひねり・回転が中心であるため、足腰や腹筋・平衡感覚が強化され、日常生活での動作が機敏になる。第二に、日本舞踊は、日本の四季の風物や、「三国一の富士の山…」「浅間の煙…」等、名所が多く描かれており、健常者に比べ旅が

困難な傾向にある障害者に旅を疑似体験させ、未知の土地への夢を与えることができる。第三に、これは、Aさんのような聴覚障害者のみが該当するが、日本舞踊は、人間の様々な感情に対する表現が細かく、たとえば、「泣く」という動作ひとつをとっても、「うれし泣き」「号泣」「むせび泣き」等、全て動作が違う。また、現代では馴染みのない「納豆売り」「水売り」等の職業の動作も出てくる。そこで、これらを表現する動作を習得すれば、手話では表現しにくい「むせび泣き」の感情や、馴染みのない職業等を手話で語る時の動作の参考になり、日常会話におけるボキャブラリーを増やし、言語生活の充実につながるのではないだろうか。第四は、現在、障害者の多くが社会的にハンディキャップを感じていることを否めない。そんな中で、日本舞踊を習得した障害者が、「健常者でも誰もができるわけではない日本舞踊を、自分ではできる」と思うことで、自らに自信を持ち、精神面でのハンディキャップ克服の一助になると思われる。また、日本舞踊を習うために教室に通うことで、自然に健常者との交流の機会が増えて、日常生活が活性化する。

以上の効用は、一部を除けば、聴覚障害者だけではなく、障害者全体に言えると思う。

したがって、今後は、視覚障害用や義手・義足の人ための日本舞踊の研究も必要なのではないだろうか。

IV. 結び

障害者の中にも、Aさんのように日本舞踊が好きな人は、たくさんいるに違いない。こうした意欲に応えるために、今後、障害者のための日本舞踊の研究を促進すべきである。

もちろん、健常者が厳しい訓練を受けてプロとなり、正しい型を保存・継承していくという日本舞踊本来の使命を蔑ろにしているのではない。本来の使命を大切にしたいうえで、障害者にも門戸を開放するのが理想である。つまり、「日本舞踊」の門を開けると、同じ高さのところに、「本来の日本舞踊」

「聴覚障害者用」「視覚障害者用」「義手・義足の入用」等、何種類もの扉があり、自分が入る扉を自由に選択できる。

これが、日本舞踊におけるバリアフリーの実現である。

文献

- 1) 世界めざし日舞の手話劇. 朝日新聞, 1987年7月13日, 夕刊.
- 2) 長崎由利子 (1997): 日本舞踊の表現と手話. 舞踊学, 20, p. 56.
- 3) 長崎由利子 (1998): 日本舞踊における「見立て」と手話. 舞踊学, 21 (6), p. 2.

※図版中の手話・指文字の図は、米川明彦監修 (1997), 日本語一手話辞典 (財団法人全日本ろうあ連盟日本手話研究所) 中の図を使用した。